

心窩部鈍痛が抑肝散加陳皮半夏で 症状改善した2例

岸本 圭永子 先生

けいクリニック

1996年 金沢医科大学医学部 卒業
2002年 大阪市立大学大学院 医学部医学科第1外科(現 腫瘍外科学)
2012年 神鋼病院附属新神戸ドック健診クリニック
2015年 吉徳会あさざり病院
2020年 けいクリニック開業



はじめに

消化器内科には、胃痛を訴えて来院される患者が多く、その主な疾患には器質性疾患群のほかに慢性胃炎、機能性ディスペプシアなど機能性疾患群がある。機能性疾患群では生活習慣の改善や酸分泌抑制剤などによる治療でも再燃を繰り返す場合が多く、治療に難渋する例は少なくない。

漢方薬は抗不安剤・抗うつ剤のような眠気が出現することなく、服用継続に影響がないうえに、投与することで症状が軽減し、西洋薬の減量・服用不要となる例があることから、漢方薬の活用は患者のQOL向上の一手段と考える。

症例 1

症 例：33歳 女性。

主 訴：胃の鈍痛。

現病歴：X年1月10日より胃の鈍痛があった。食事摂取も可能であるため様子を見ていたが、同18日の夜間に胃の鈍痛とともに左側腹部痛も出現し、このために不眠となったため、翌19日に当院を受診した。

所見／東洋医学的所見および診断・治療：図1に示す。東洋医学的所見より、抑肝散加陳皮半夏を選択した。

臨床経過(図1)：初診後18日目：「胃部鈍痛は少しあるが側腹部痛はなくなった。なんとなく気分も良い」とのことで、抑肝散加陳皮半夏の継続服用を希望された。

初診後30日目：「漢方薬を時々飲み忘れるが、胃の調子は良い。頭に血がのぼる感じ・頭痛も改善している」との

ことで、本人の希望により抑肝散加陳皮半夏の服用を継続し、以後も症状は安定している。

症例 2

症 例：72歳 女性。

主 訴：胃痛。

現病歴：1週間前より食後に胃の鈍痛と嘔気が出現、改善がないため当院を受診した。

所見／東洋医学的所見および診断・治療：図2に示す。東洋医学的所見より、抑肝散加陳皮半夏を選択した。

臨床経過(図2)：初診後11日目：「漢方薬の服用後イライラがなくなり、胃部鈍痛や嘔気が気にならなくなった。中途覚醒もなくなり体調が良い」とのことで、抑肝散加陳皮半

図1 症例1 33歳 女性

所見／東洋医学的所見

- 体格中等。
 - 脂もの摂取で腹痛や下痢になることがある。
 - 頭に血がのぼる感覚・頭痛を認める。
 - 夜間中途覚醒あり。
- 脈診：沈 やや弦
舌診：淡紅色、白苔
腹診：腹力3/5、心下痞、臍上悸、両側胸脇苦満、左臍傍圧痛
→抑肝散加陳皮半夏を選択した。

臨床経過

- 抑肝散加陳皮半夏エキス細粒(7.5g/日)で処方を開始した。
- 初診より18日目に再来。
 - ・「胃部鈍痛は少しあるが側腹部痛はなくなった。なんとなく気分も良い」
 - ・抑肝散加陳皮半夏の継続服用を希望された。
- 初診より30日目に再来。
 - ・「漢方薬を時々飲み忘れるが、胃の調子は良い。頭に血がのぼる感じ・頭痛も改善」
 - ・以後も抑肝散加陳皮半夏の継続処方にて症状は安定している。

夏の継続服用を希望された。

初診後30日目：「漢方薬を時々飲み忘れることもあるが、胃部症状は気にならない。気分的にも上向きで調子が良い」とのことで、以後も抑肝散加陳皮半夏の服用を継続中であり、経過は良好である。

考察

抑肝散は、原典の『保嬰金鏡録』で「抑肝散、肝経の虚熱、発搐或は発熱咬牙、或は驚悸寒熱、或は木土に乗じて痰涎を嘔吐し、腹膨少食、睡眠安からざる者を治す」と記されている。山田業広は『椿庭先生夜話』で、「抑肝散は、他の疎肝薬とは大いに異なり、脾胃をたすけて肝をゆるめる薬である」と解説している。

抑肝散加陳皮半夏は抑肝散に陳皮・半夏を加味した処方であり、抑肝散+二陳湯から生姜を引いたもの、「肝」に作用する釣藤鈎・柴胡・川芎・当帰と、「脾」に作用する六君子湯から人参・生姜・大棗を引いたものとなっている。脾胃を助ける抑肝散に理気作用のある陳皮・半夏を加えること

で、さらに脾胃を助ける働きを強化した処方と考えられる(図3)。

今回経験した2症例は、胃痛の背景に「肝」の異常が存在したため、抑肝散加陳皮半夏で症状が軽減したと考える。症例1は腹診で臍上悸があったため、抑肝散加陳皮半夏を選択した。左側腹部の強い痛みをともなっており、「左腹部の拘急」と考えると抑肝散の腹証であったと考える。抑肝散は「脾胃を助けて肝を緩める薬」であり、消化機能が低下し、かつ、「肝」の異常を認める症例に適応がある。さらに、ここに理気作用がある陳皮・半夏を加味した抑肝散加陳皮半夏は「胃痛症状」にも有用であることが示唆された。

まとめ

心窩部鈍痛に抑肝散加陳皮半夏が有用な2例を経験した。抑肝散加陳皮半夏は抑肝散証が慢性に経過し、やや虚証で、大動脈拍動が触知される患者に適応がある。胃痛の訴えとともにイライラ・焦燥感・中途覚醒といった「肝」の異常を伴う場合の選択肢の一つに挙げられる。

図2 症例2 72歳 女性

所見/東洋医学的所見

身長：161cm、体重：45.7kg、BMI：17.6
 中途覚醒あり。家人にイライラすることがある。不安感がある。食欲低下、体重減少あり不安。目が疲れやすい。身体がだるい。
 脈診：浮沈中間 弦
 舌診：紅、白苔、舌下静脈怒張
 腹診：腹力2/5、心下痞、両胸脇苦満、臍上悸、下腹膨満
 →抑肝散加陳皮半夏を選択した。

臨床経過

- 抑肝散加陳皮半夏エキス細粒(7.5g/日)で処方を開始した。
- 初診より11日目に再来。
 - ・「漢方薬の服用後イライラがなくなり、胃部鈍痛や嘔気が気にならなくなった。中途覚醒もなくなり体調が良い」
 - ・抑肝散加陳皮半夏の継続服用を希望された。
- 初診より30日目に再来。
 - ・「漢方薬を時々飲み忘れることもあるが、胃部症状は気にならない。気分的にも上向きで調子が良い」
 - ・以後も抑肝散加陳皮半夏の服用を継続している。

図3 抑肝散加陳皮半夏の処方構成

抑肝散加陳皮半夏									
釣藤鈎	柴胡	川芎	当帰	茯苓	白朮	甘草	陳皮	半夏	赤：温性 紺：寒性 黒：平性 原典：「本朝経験方」
① 抑肝散+二陳湯-生姜 ② 釣藤鈎・柴胡・川芎・当帰+六君子湯-人参・生姜・大棗 (肝) (脾)									
柴胡	疎肝・清熱	熄風	釣藤鈎						
当帰、川芎	補血・活血	健脾	甘草、白朮、茯苓						
陳皮、半夏	理気								

Discussion

- 木村**：抑肝散の原典にある「木土に乗じて」は、五臓における「木剋土」の関係ですが、各症例でイライラなどの原因となるストレスはありましたか。
- 岸本**：症例1は職場環境が変化したことによるストレス、症例2は飲食店経営者でコロナ禍でのストレスがありました。
- 木村**：肝と脾の相剋関係では抑肝散加陳皮半夏以外にも加味逍遙散も鑑別に挙げられると思いますが、先生はどのように鑑別をされていますか。
- 岸本**：加味逍遙散は冷ます生薬が多いので、脾の所見としては熱状がある状況に良いと思います。抑肝散加陳皮半夏は脾胃を助ける働きに、半夏・陳皮が加味されているので、より胃部症状が強い方に良いと思います。